



2015 -2016 年度

国際ロータリー会長：K. R. ラビンドラン「世界へのプレゼントになろう」

第2560地区ガバナー：山本 和則「夢（gift）を明日へ繋げよう」

三条北ロータリークラブテーマ「ロータリーの輪を広げよう」

会長：外山 晴一
幹事：渋谷 義徳
SAA：石川 一昭

例会日：火曜日12:30～13:30
例会場：三条ロイヤルホテル TEL:34-8111
事務局：三条市本町3-5-25三条ロイヤルホテル内
TEL:0256-35-7160 FAX:0256-35-7488



HP: <http://www.sajo-nrc.org>

AD: north@sanjo-nrc.org

本日の行事：

「市内4ロータリークラブ

合同公開例会」

- ◆講師：新潟産業大学経済学部准教授
蓮池 薫 氏
- ◆本日の出席：66名中41名
(内記帳13名)
- ◆先々週の出席率：66名中53名 80.30%
(前年同期 83.82%)
- ◆先週のメイクアップ
 - 10月14日三条RC 山崎 勲
石黒隆夫、山中 正
土田百合子、米山忠俊
 - 15日三条東RC 山中 正
石黒隆夫、石川勝行
 - 15日会長杯ゴルフコンペ
落合益夫、岡田 健、渋谷義徳
田口実仁佳、米山忠俊、加藤 實
早川瀧雄、武田恒夫、柄沢憲司
外山晴一、坂本勝司、佐藤義英
石川一昭、今井克義、石丸 進
丸山 勝、丸山正男、岡田大介
斎藤良行、斎藤 正、大橋政雄
 - 19日三条南RC 坂内康男
高橋彰雄、山中 正
- ◆本日の記帳受付（敬称略）
 - 三条RC 斎藤弘文、阿部吉弘、山田富義
中村和彦、木村文夫、伊藤寛一
加藤紋次郎
 - 三条南RC 坪井正康、坂本洋司、吉沢栄一
 - 三条東RC 佐藤公信

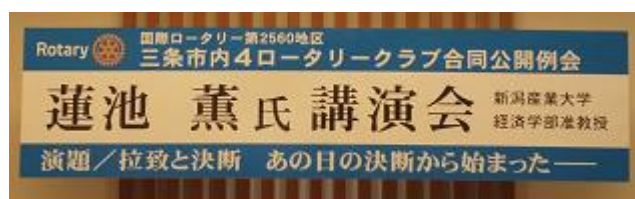
三条市内4RC合同公開例会

蓮池薫氏講演会

会場：ジオワールドVIP グランドホール
一般市民参加数：200名
参加会員数：100名（4RC合計）

講師 蓮池 薫 氏 プロフィール

1957年 新潟県柏崎市生まれ。
中央大学法学部3年在学中に拉致され、24年間、北朝鮮での生活を余儀なくされる。
帰国後、1年間の市役所勤務を経て、新潟産業大学 嘱託職員・非常勤講師として働くかたわら、中央大学に復学。
2005年に初の訳書「孤将」を刊行。
2008年3月 復学していた中央大学 卒業
2013年3月 新潟大学大学院博士前期課程 修了
2013年4月～現在 新潟産業大学経済学部 准教授
訳書：「ハル 哲学する犬」「私たちの幸せな時間」「トガニ」など20数冊。
著書：共著1冊を含め5冊。
うち2009年6月刊行の「半島へ、ふたたび」（新潮社）は新潮ドキュメント賞を受賞。
2012年10月に「拉致と決断」（新潮社）を刊行。



会長挨拶：星野健司三条南RC会長



市民の皆様、ロータリアンの皆さん、こんにちは。三条南ロータリークラブ本年度会長の星野です。本日は週末の大変お忙しい中、三条市内4ロータリークラブ合同公開例会にお集まりいただき誠にありがとうございます。最後までご清聴よろしくお願ひ申し上げます。

また、蓮池薫様におかれましては、大変お忙しい中、本日の公開例会の講師をお引き受けいただき感謝申し上げます。

ここで少し時間を頂戴し、私共ロータリークラブのご紹介をさせていただきます。ロータリークラブは職業倫理を重んじる職業人の集まりで幅広い奉仕活動を実践している団体です。

ロータリークラブは今から110年前にアメリカのシカゴで誕生し、現在200以上の国と地域に広がり、クラブ数は35,109 会員総数1,235,536人(2015年5月31日RI公式発表)

が在籍しています。日本全体のクラブ数は2,269、会員数87,727人(2015年7月末現在)となっています。三条市内では三条クラブ、三条北クラブ、三条東クラブ、三条南クラブと4つのロータリークラブがあり204人の会員が日々奉仕活動に努めております。

さて、本日の講演会には、中央大学3年在学中の1978年に、不幸にも北朝鮮の拉致に遭遇し24年間大変な苦勞をされ2002年によりやく帰国された蓮池薫様を講師にお迎えいたしました。拉致問題は毎日のようにマスコミが報道いたしますが、一向に解決に至らず、特に新潟県は拉致被害に遭われた方が多く、県民の皆様も心を痛める事件であります。講師の蓮池様には拉致の実態を含め、現在までの拉致問題についてご教示お願ひ申し上げます

最後となりますが、拉致被害に遭われていらっしゃる方々が一日も早く帰国できますことをご祈念申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。

最後となりますが、拉致被害に遭われていらっしゃる方々が一日も早く帰国できますことをご祈念申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。

「拉致と決断」あの日の決断から始まった—

新潟産業大学経済学部准教授 蓮池 薫 氏

「拉致」によって私が奪われたものは命を除いた残り全てでした。その中でも「夢と絆」が一番重いものです。拉致されてすぐは現実が信じられず、何かの間違ひではないかとの思いが数か月続きました。間違ひなら早く帰してくれと必死で抗議したり、手を合わせて拝んだりしました。ところが2~3か月経って到底日本に帰す気はないと思った瞬間、つまりあきらめかけた瞬間、私はとてつもない絶望感に襲われました。人間生まれながらにして、大きい小さいは別にしてみんなが自分の可能性を持っています。その可能性を活かして生きることが生きがいであり夢だと思います。そのために努力できる選択肢、選択の自由を持つということがその人にとってもっとも大事な権利の一つです。その夢、選択の自由をすべて奪われた絶望感、言葉に表すことすらできませんでした。また、家族と引き離された孤独感、自分の生存を家族に知らせたくても知らせられないつらさも苦しいものでした。

1978年7月31日、私は今の家内と新潟県柏崎市の中央海岸でデートをしていましたが、あいにくにもそこに北朝鮮の工作グループが一般市民を拉致するために浸透して網を張ってしま

た。砂浜に座っているとタバコの火を貸してくれと言ってきました。火をつけた瞬間、後ろ

から忍びよってきた別の人間たちに襲われました。私は顔面を殴られ、彼女は猿ぐつわをされ、近くのくぼみに引きずり込まれ、強い力で押さえつけられました。その後沖合から来たボートに、袋にすっぽり入れられた状態で荷物のごとく載せられました。その後さらに母船に載せられた二人は、別々の船室に分けられ、一路、北朝鮮の清津(チョンジン)に向かいました。私は清津市のある宿舎に連れて行かれ、10日間、平壤に行く準備をさせられました。その間一番怖かったのは朝です。寝ているときは忘れていても朝が来ると拉致されたという現実を引きずり戻されるのです。不安なのは何も知らされないことでした。彼女はどうしたのかと聞いても、平壤に行けばわかると繰り返すばかりでした。平壤に着いて私が入れられたのは、農村



地帯にある招待所でした。招待所は特殊機関が
作員を養成する秘密アジトのようなところ
です。そこで私は彼女は日本に帰したと聞かされ
ました。そこで3か月過ごすのですが、その間、
逃げないようにといろいろ脅されもしました。
しだいに抵抗しても無駄だという気持ちになる
なか、自分の置かれた現状や先行きのことを知
るためにも朝鮮語を身に付けようと思いました。
それからというもののテレビなどを教材に1年間、
必死で朝鮮語を勉強しました。

拉致され1年9か月経った頃、大きな変化が起
きました。結婚しないかと言われたのです。相
手はあなたの彼女だと。本当に目の前が明るく
なりました。私たちを結婚させたのは逃げない
よう監視するのに限界があり、それよりは結婚
させて落ち着かせたほうが、無謀な行動はしな
いだろうと考えからだったようです。その背景
には拉致されたレバノン女性が逃亡するという
事件があったということはずっと後で知ったこ
とでした。

子供が生まれたときに、果たして日本に帰れる
前提で育てるか、それともこの国で一生生活す
ることを前提に育てるかで悩みましたが、いく
ら考えても答えは後者でした。それから日本に
帰りたいという話は一切口にせずに子育てに専
念しました。その頃、子育てにはいろいろな困
難がありました。一つは我々が秘密に属する人
間なので、秘密保持のため、子どもを家から1
50キロ離れた全寮制の学校に送らざるを得な
かったこと。二つ目は日本人であることを明ら
かにできなかったことです。反日教育が行われ
ている北朝鮮で、日本人として生きていくのは
難しく、したがって在日朝鮮人という偽装経歴
で暮らしました。

また、子どもの将来に悪影響がないように、親
以外の家族親戚はすべて死亡したと子供に嘘を
つけました。我々にとって子供を育てることは
「生きがい」となり、その「絆」にすがって生
きていくことが生活の全部となり、このまま北
朝鮮での人生が過ぎていくものと思っていまし
た。

そんな1998年に労働新聞で日本が拉致問題
で騒いでいると報じました。その年は拉致され
20年の集会在日本で行われていました。

しかし日本で活動してくれるのはうれしいが、
逆に我々が奥へ奥へ追いやられるのではないか
と危惧しました。事実、山奥の家に追いやられ、
ここで死ぬまで暮らせと言われました。ところが
2002年になって日本との関係改善に迫られ
た北朝鮮は、我々の存在を公表することにし

ました。公表されれば自分たちが生きているこ
とが親に伝わるという希望が生まれました。2
002年9月の小泉総理の訪朝を経て、今度は
突然日本に行つて来いと言われました。ただし、
子供は連れて行けず、逆に秘密を守るために子
供には国内旅行に行くと言われました。
日本では子供は返してもらからこのまま日本
に残れという兄と大ゲンカになりました。母は
24年ぶりに会って兄弟げんかするくらいなら、
ここから飛び降りて自殺すると言いました。
24年ぶりに会った家族に言い争いをさせる、
そんなところにも拉致事件の惨さがあるのです。
しかし、その後、故郷の懐に包まれた私は、日
本にとどまって子供を待つ決心をしました。ま
だ日本から何の見返りももらっていない北朝鮮
だけに、多少時間はかかっても子供はきっと帰
すだろうと思ったからです。子供にとって日本
と北朝鮮のどちらがいいか考えたときに、夢
を花咲かせることができるのは、日本しかない
とも思いました。このまま日本に残るとする決
心を話すと、家内は最初強く反発しましたが、
決心に至った経緯を話すと納得してくれました。
子どもたちが帰るまでは、市役所の仕事に没頭
しました。励ましの手紙もあれば誹謗中傷も届
く中、家族に支えられました。母親は「私は2
4年間も会えなかった。お前は子供に1年やそ
こら会えないだけでくよくよするな」と落ち込
む私を鼓舞しました。その後子供たちが日本に
来たことで、北朝鮮でできた絆と日本での絆が
初めて一つになりました。私は拉致問題の解決
で一番大事なことは絆と夢を取り戻すことだ
と思います。現在、残された人たちの思いを考
えると、心配です。私たちは帰国する10日前
までは日本に帰れるとは夢にも思わず暮らして
いました。しかし、現在北に残されている被害者
は我々の帰国をほぼリアルタイムで聞いていた
はずで、自分たちもこのように帰れると期待で
胸を躍らせていたはずで、しかし、何もな
いなか、11年という歳月が経ちました。
期待はすでに絶望に変わっているかもしれませ
ん。家族の絆は永遠ではなく、命が続かなけれ
ば繋がりません。また、年を取れば日本に帰っ
てきても夢を追うことはできません。一日も早
い解決を望んでやみません。本当に私は失っ
てみて初めて絆と夢のありがたさや貴重さを感じ
ました。このような私の体験談が、少しでも皆
様のお仕事や活動の参考になればと祈念しな
がら、私の講演を終わらせていただきます。あり
がとうございました。

閉会挨拶：外山晴一三条北RC会長



只今は、蓮池先生より大変興味深いご講演をいただきありがとうございました。先生の拉致問題早期解決の熱意が伝わり、あっという間の1時間半でした。

拉致問題の早期解決が望まれているにもかかわらず、問題解決の糸口が見えません。今日の講演で先生がおっしゃったように北朝鮮に対しては強硬姿勢一辺倒だけでなく、外交交渉ですから、相手の欲しがっている経済協力援助も一方で提示しながら進め、一刻も早く解決するべきと思います。

日本は災害や飢饉などが外国に起ると援助しております。私たちロータリークラブも災害時はもとより、普段でもポリオプラスといってポリオはじめとする伝染病の撲滅や識字率向上のために遠くアフリカにまで援助をしています。しかしお隣の北朝鮮に飢餓や災害が起きてても、全く援助をしておりません。日本全体も同様です。拉致問題が原因で、善隣友好が出来なく全く不幸な状態が続いております。この意味からも拉致問題の早期解決が望まれます。



講師紹介
三条南RC
荒澤社会奉仕委員長



司会進行 三条南RC
木村副SAA